海外・帰国
あれこれコーナー

以前の「帰国子女教育」は、「困っている帰国生をなんとかしよう」という取り組みが中心でした。しかし、「帰国してもあまり困らない」（実際にはそれは表面的なことなのですが）という子どもたちの場合でも、海外生活で築き上げた財産が生かせないのでは、いかにも残念です。

その子どもたちの「財産」は、どんな力なのか、帰国してから子どもたちがそれを発揮できるようにするにはどうしたらよいか、親も教師も、そこに目を向ける時が来ていると思います。

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきたいと思います。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Ｅメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

担当　佐々　信行
（さっさ　のぶゆき／啓明学園初等学校　校長）

「海外・帰国子女教育」の歩み
― 自己紹介をかねてー

夏休みが終わり、私のいる啓明学園初等学校には、海外から 10 人の子どもたちが編入してきました。その中の多くは、初めて日本の学校生活を体験する子どもたちです。海外で生まれた子もいます。この子たちにとっては、日本での新しい生活を「帰国」と呼ぶのは無理があります。いきなり日本の学校の運動会に参加するのは、かなりのカルチュアショックにちがいありません。それでも、楽しそうに踊ったり、慣れない係の仕事に一生懸命取り組んだりしている姿を見ると、日本の将来のために大きな希望を感じます。

海外子女との出会い

私と海外子女との出会いはは、1974 年、当時の西ドイツ、ハンブルクの補習校でのことです。現地校あるいはインターナショナルスクールと補習校の二つの学校でしっかりがんばっている子どもたちの姿は、頼もしく、新鮮でした。当時の小中学生は、今はもちろん立派な社会人になっていますが、今でも親しく連絡を取り合い、つきあっている人が多いようです。転入転出が多く、いっしょに過ごした期間は短くても、同じ苦労を味わい、助け合った仲間だけに強い結びつきがあるのでしょう。友だちも、海外生活で得ることのできる大切な財産です。

日本で帰国子女と

三年間の勤務の後、私は横浜へ帰りましたが、そのころから、少しずつ、帰国する子どもたちの数が増え、学校での問題がクローズアップされるようになってきました。日